

有明へだに隔へだつる海なかりのなかりせば
駿河するがの桜い如何かに愛めでらむ

令和四年三月二十六日

大中臣正比呂



桃いの節句かが過ぎると、直ぐに桜の季節だ。夜明け前の有明海に月は残り、
鳥賊釣いり船かの灯かりだけかが微かかに「海かはつなひとがっているよ」と囁く。

遠おい地おに居おては富士見ありの里わの彼らの女なをどうして愛めしたらいいのらうか。
大伴家持おに聞きくべきか、在原業平ありに教おえを請こうべきか。モー、寝ねよつと。